

2014年1月26日 主日礼拝

説教 神さまは羊飼い

詩篇 23篇

【詩篇の真珠】

名説教者スポルジョンはこの詩篇をこよなく愛し、「詩篇の真珠」と呼びました。この美しい詩篇から神さまのみ声を聴かせていただきましょう。

【羊飼いの愛】

「主は私の羊飼い」(1)とあります。羊飼いはいつも羊といっしょにいて、羊を草と水のあるところに連れて行って養い、敵から守ります。よい羊飼いは羊を愛する羊飼いなのです。

愛とは何でしょうか。栗原加代美(かよみ)さんはDVの被害者でしたが、今はDV加害者更正のために働いています。彼女によれば、DV加害者の多くは親から虐待を受けたり、父親から母親へのDVを見てきた方々で、彼らの周りには他人を愛するよいモデルがいなかった、のだそうです。愛することがわからず、相手を支配しようとするのです。愛とはだいにすること。だいにされたことがないと、だいにすることがわからない。

栗原さんは、主イエスにお会いして、愛するとはどんなことかを知り、主イエスという良いモデルを知ることができました。主イエスこそがまことの羊飼い。ほんとうに私たちを愛して、養い、守るお方。それだけではなく、私たちのために命を捨ててくださるお方。ここに愛のモデルがあります。単にモデルであるだけでなく、主イエスは新

しい生き方をすることができる新しい生命を与えます。主イエスとつながるときに、新しい生き方が私たちの中に始まっているのです。そして主イエスに似せられていくのです。

【義の道への導き】

「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます」(3)。聖書の言う「義」、すなわち、「正しさ」とは何でしょうか。それは、神さまとのまっすぐな関係、正対する関係。過ちがない、罪がないというのが、聖書の正しさではありません。罪があるならば、神さまに赦していただく。自分の心に痛みがあるなら、神さまに打ち明けていやしていただく。それが聖書の正しさです。

羊はよい羊飼いを知ります。私たちも私たちのよい羊飼いである神さまを知っています。神さまと正対し、そこからずれたときには、ただちに正対に戻り続けるなら、ますます神さまがわかってくるのです。

【神さまの杖】

「あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです」(4)。むちは野獣と闘って、羊を守るためのもの。杖は、羊が道からそれようとするときに、そっとわきばらに触って、まっすぐに歩かせるためのもの。羊はすごい近眼で目の前のものしか見えず、すぐに道を踏み外しそうになります。すると羊飼いはそのわきばらを杖で触れる。羊にとっては、なんと

もたのもしい、うれしい感触。私たちにもそのように導いてくださる神さまがいてくださる。私たちも先のことが分からないという点では近眼。明日のことがわからないけれども、だいじょうぶ。どんなことがあっても対応することができる羊飼いが私たちにはいます。私たち羊だけでやっていくのではないのです。神さまという羊飼いの杖。この杖がだれかを打ったことがただ一度だけあります。それは十字架。父なる神が子なる神を。神がご自身を打たれたのでした。

【とこしえまでも神さまと】

「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」(6)。旧約聖書にこんなにも、はっきりと永遠が。この世の人生の終わりが、ほんとうの終わりだと思っている人は、そのように生きるしかありません。マラソンのゴールにあるテープを切ることしか考えることができないのです。けれども、永遠を知っている人たちにとって、この世の人生の終わりは、跳び箱の踏切板のようなもの。終わりに近づくに連れてますます加速して、そして最後の瞬間に跳ぶのです。永遠に向かって。神さまのふとところに向かって。

【追ってくる恵み】

「いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう」(6)。ここにすべての祝福の土台があります。神さまの恵みは、私たちを決してのがしません。死の瞬間も私たちを手放さなかった主イエス、ほんとうの羊飼いが私たちにいてくださるのです。